LINE コミュニケーションにおけるトラブル行為の様態とパーソナリティ特性に関する研究
—現実との連続性と傍観行動に注目して—

若本 純子（佐賀大学）　西野　泰代（広島修道大学）　原田恵理子（東京情報大学）

目　的

近年，学校教育において，LINE コミュニケーション・トラブルへの対応が課題になっている。本研究では，児童生徒のうち，９割以上が LINE を使用している（e.g., 若本, 2016）高校生を対象に，いじめ抑止と介入の鍵になる傍観行動（e.g., 森田, 1990；Polanin, Espelage, & Pigott, 2012）について，LINE コミュニケーションと現実との連続性および個人のパーソナリティ要因との関連に注目して検討を行う。

方　法

2016 年 6～8 月に，A，B 高等学校 2 校の 1 年生を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は，1)傍観行動（場面想定法による）：大西・黒川・吉田(2009)を参考に，回答者が傍観者の立場にあるいじめと見なしうる事例を作成し，そこでの傍観行動をとる程度をきいた。12 項目 4 段階評定。パーソナリティ要因として，2) 被異質視不安（高坂, 2010）11 項目 5 段階評定。，3) ソーシャルスキル（嶋田，1998）：「向社会的スキル」10 項目，「引っ込み思案行動」8 項目，「攻撃行動」7 項目の計 25 項目からなる。4 段階評定，その他フェイス項目として学級，性別。

回収数は，A 高校 321，B 高校 324，計 645 であった。全変数において学校による有意差がないことが確認されたため，以下の分析は一括で実施した（男女の構成：男子 321（49.8%），女子 324（50.2%），年齢 M(SD)：15.27(.45)，LINE 使用歴：中央値で 2 年，1 日の使用時間：中央値で 1 時間）。

結果と考察

使用尺度を探索的因子分析および主成分分析した結果，既存尺度に関しては先行研究通りの因子数・成分数が得られた（.74<α<.89）。一方，独自に作成した傍観行動尺度では，「対面状況において被害者が仲がよい友人の場合の傍観行動(α=.79)」「対面状況において被害者がさほど仲がよくない友人の場合の傍観行動(α=.87)」「LINE コミュニケーション状況で被害者が仲がよい友人の場合の傍観行動 (α=.87)」「LINE コミュニケーション状況で被害者がさほど仲がよくない友人の場合の傍観行動(α=.88)」の 4 因子が抽出された。内的整合性が確認されたことから，これらを合成変数として以下の分析を進めた。

まず，場面（対面・LINE コミュニケーション）×対象（仲がよい友人・さほど仲よくない友人）4 種類の傍観行動得点と，パーソナリティ変数である被異質視不安，社会的スキルの下位尺度である向社会的スキル，引っ込み思案行動，攻撃行動との間の直接関連を検討するために相関分析を実施したところ，$|.09|<r<|.24|$の弱い相関しか見られなかった。ここから，LINE コミュニケーション状況における傍観行動の生起が，直接的にパーソナリティ要因と関連しているわけではなく，対面状況においても同様であると考えられた。

続いて，LINE 使用と現実との連続性を想定した検討を行うために，LINE コミュニケーション状況，対面状況それぞれの傍観行動得点の平均値を境に高低に分け，組み合わせ 4 群を作成した。内訳は，1（LINE 傍観高・対面傍観高，N=282）群，2（LINE 傍観高・対面傍観低，N=70）群，3（LINE 傍観低・対面傍観低，N=233）群，4（LINE 傍観低・対面傍観高，N=55）群であった。1 群と 3 群を併せると約 9 割の高校生が含まれていたことと，傍観行動間の相関分析からさほど仲がよくない相手の場合の対面 - LINE 状況では r=.72，仲がよい相手の場合でも r=.68 であり分散説明率が 5 割前後であったことから，高校生の傍観行動は，対面か LINE かというコミュニケーション状況の影響は受けにくく，比較的一貫していると考えられた。

この一貫した傾向とパーソナリティ要因との関連が想定されたため，パーソナリティ変数を従属変数，傍観 4 群を独立変数とする 1 要因分散分析を行ったところ，すべての変数で有意な結果が得られた（被異質視不安 $F(3,636)=12.13$, $p<.001$，向社会的スキル $F(3,633)=8.31$, $p<.001$, 引っ込み思案行動 $F(3,633)=4.51$, $p<.01$, 攻撃行動 $F(3,633)=3.21$, $p<.05$）。多重比較（Tukey 法, p<.05）の結果，1（LINE 傍観高・対面傍観高）群は 3（LINE 傍観低・対面傍観低）群と比較して被異質視不安が高く，向社会的スキルが低く，引っ込み思案行動と攻撃行動が高かった。この結果から，傍観行動が一貫して高いか低いかはパーソナリティ特性と関連しており，傍観行動をとりやすい者は，相対的に，人と違っていると見られることに不安を感じ，社会的スキルが総じて低い一方，傍観行動をとりにくい者は，他者と異なる行動をすることへの不安が低く，社会的スキルが高いことが示唆された。

さらに，高校生の傍観行動を規定する他の要因を検討するために，対象による傍観行動の差（対象が仲よい友人とさほど仲よくない友人との比較），ならびに状況による傍観行動の差（対面か LINE コミュニケーションかの比較）を，傍観行動 4 群別に，対応のある t 検定を用いて検討した。その結果，傍観 4 群すべてにおいて対象による有意差が認められ，いずれも，さほど仲よくない友人のほうが仲よい友人よりも傍観行動得点が高かった。一方，状況の検討では，3（LINE 傍観低・対面傍観低）群では他 3 群と異なる結果が得られ，1（LINE 傍観高・対面傍観高）群，2（LINE 傍観高・対面傍観低）群，4（LINE 傍観低・対面傍観高）群では，LINE コミュニケーションのほうが対面と比較して有意に傍観行動得点が高かったのに対して，3（LINE 傍観低・対面傍観低）群では有意差が認められなかった。ここから，高校生の傍観行動が対象との関係性に依存しており，高校生の仲がいい友人とそうでない友人への傍観行動は明確に異なること，そして，全般的には対面状況よりも LINE コミュニケーション状況のほうが傍観行動が起こりやすいが，社会的スキルの高さや被異質視不安の低さをもつ高校生に関しては，コミュニケーション状況には影響されにくいことが示唆された。